

協同の意義

杉 江 修 治

1 協同とは何か

(1) 目標構造からの定義

協同とは「心をあわせ、力をあわせ、助けあって仕事をする事」(西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫 1979)、競争とは「勝ち負け・優劣を人とせりあう事」(同前)。国語辞典ではこのような記述が見られる。辞典にある協同と競争の理解は、集団の活動の過程に注目している。協同は仲良く暖かいイメージを持つとともに、ときには生温い人間関係という捉え方もなされる。競争は競い合っている様子を言い、厳しく鍛え合うというニュアンスを感じる。協同と競争は、一人ひとりの生活経験や価値観などとも関わって、その生活上の意義については評価が分かれている。

ところが、協同と競争を、集団過程に着目して理解していたのでは十分にその本質を知ることはできないのである。「学校教育では協同が基本だが、ときには良い意味の競争も必要だ」という考えは、多くの教師たちに受け入れられることだろう。しかし、「良い意味の競争」とは何を指すのか。おそらく個々の教師でその具体化は異なるだろう。

文化人類学者の Mead, M. (1936) が、未開民族における協同的、競争的、個人的側面を検討した際には、①個人が自分の時間を注ぎ込む主要な目標は何か、②集団の活動が向けられる主要な目標は何か、③「分かち合った」「競争的な」「個人的な」という3種類の目標に向かって個人と集団が注ぎ込む時間とエネルギーの比率、の3点を基準として文化の傾向を分類した。また、協同は「一つの目標に向かって一緒に働く活動」、競争は

「他者が同時に得ようと努めているものを得ようと求め、努力している活動」と定義されている。また、競争に類似した概念として敵対性をあげ、それは目標ではなく他者に向けられた行動であり、その他者を負かすことが第一義になっていると説明した。そこでは、それぞれの文化のもとにいる人々の行動の目標の置き所が協同と競争を分ける基準となっている。より厳密な、グループ・ダイナミックスの領域でも、集団の目標に視点を置いた協同と競争の区別をし、概念化を試みている。それは、協同と競争の、集団事態としての特性を理解するうえでより適切なものであり、教育との関わりを考え、実践化を図る場合にも有効なものである。

Deutsch, M. (1949a) は、それまでの社会心理学的研究の成果を踏まえ、協同と競争を次のように定義した。

協同的な社会事態では、検討対象となっている事態下の個人または下位単位にとっての目標は、次のような特徴をもっている。その事態下にいる個人または下位単位それぞれにとっての目標領域は、検討の対象となっているすべての個人または下位単位も、めいめいの目標領域に（ある程度）入ることができた場合に限り、当該個人または下位集団は全員目標領域に（ある程度）入ることができる、というように定義される。

競争的な社会事態では、検討対象となっている事態下の個人または下位単位にとっての目標は、次のような特徴をもっている。その事態下にいる個人または下位単位それぞれにとっての目標領域は、もしその目標領域に個人がだれか一人でも、または下位単位がどれか一つでも（またはあらかじめ決められたある割合の個人または下位集団が）入りこんだら、他の個人または下位単位は検討しているその社会的事態下での彼らのそれぞれの目標にある程度到達できない、というように定義される。
(pp. 131-132)

Deutsch は、協同事態を構成する目標を促進的相互依存目標 (promotively interdependent goals) と呼び、競争事態を構成する目標を妨害的相互依存目標 (contriently interdependent goals) と呼んだ。協同事態では、集団成員全員が目標に到達したときに、個々の成員の目標も達成で

きたこととなるような目標が設定されており、競争事態では、だれか一人が本人の目標を達成すると、他の成員は目標に到達できないという特性をもった目標が設定されているのである。

多くの教師が良い競争と考えているものに、仲間同士の磨き合い、切磋琢磨があろう。Deutsch の定義にしたがった場合、これは競争といえるのだろうか。集団過程に目を向ければ、切磋琢磨は競い合う様相を示すが故に競争ということになるだろうが、切磋琢磨のめざすところは、それに取り組んでいる双方が最終的に共に育つことである。一方が負けて落伍するような場合は切磋琢磨とは言わない。磨き合い、共に光りを増すがゆえの表現である。互いに相手のために競い合い、そのおかげで双方が大きく伸びるとしたら、それは協同ではないのか。良きライバルとは、競争相手ではなく、協同の仲間なのである。

また、全生研常任委員会 (1990, 1991) では、生活指導の過程で「協同的競争」を重要な観点として論じている。「それは、班と班とが競争しつつ、協同して集団の目的を実現していくものである。したがって、それは、班と班との敵対的関係を協同的關係に転化していくことを課題とするものである」(全生研 1991, p. 171) とあるように、過程は競い合いながらも、集団同士が共に伸びることを目標とした概念である。したがって、グループ・ダイナミックスの観点から言えば、この「協同的競争」はむしろ「競争的協同」と呼ぶべきことがらなのである。

(2) 協同と競争の動機づけ的側面

集団による作業や学習を行なう場合、協同も競争も、その集団成員の動機づけを高める機能をもつ。協同と競争がもたらす成果は、次項に述べる実証的諸研究で明らかかなようにそれぞれ異なる側面を持つ。協同と競争がもたらす動機づけは、その強さだけでなく、内容、方向において差があると考えられる。

Shaw, M.E. (1958) は、大学生を対象として、作業課題、記憶課題について、協同、競争、個別の3事態間で成績を比較した実験で、協同事態の優位性を見いだしている。彼はそこで、協同事態が強い達成への動機づけをもたらすことを結論づけると同時に、競争事態もまた同様に高い達成動

機を生起させていることを指摘している。ただし、競争事態では高い動機づけがありながらそれが成績に反映されない理由として、個々の集団成員が、自分のまずさを他人に転化できないこと、したがって取り組みの過程で自尊心が脅かされることになることをあげている。競争は協同よりも達成の動機づけを高めるが、そのより強い動機づけがパフォーマンスを劣ったものにする。失敗から引き起こされた自尊心への脅威が課題無関連反応による妨害を引き起こす。しかし、正確さを測定せず、速さのみをパフォーマンスとする場合は、競争がすぐれるだろう、というのが、Shawの結論であった。

また、Ames C. (1984) は、教室学習における協同、競争、個別という目標構造の設定が、生徒の学習行動をどのように方向づけるか、いいかえれば生徒がどのような行動に動機づけられるかを整理している。彼女によれば、協同的目標構造は道徳志向的な活動、競争的目標構造は自己中心的な活動、個別的目标構造は達成を志向する活動を強める。協同事態では、生徒は個人の課題達成と集団の他のメンバーの課題達成の双方に目標を置くことになり、成功の基準は集団の成功が前提になる。そこでは成績の低い生徒も自己評価を高められることになる。一方、競争事態では、他人に勝つことが活動の目標であり、生徒は社会的比較情報の収集に精力を注ぐ。自己評価は勝ち負けの結果であり、取り組んだ過程は意識されないことになる。あくまで、目標は個人の中にとどまるものであり、失敗も個人が全面的に受けとめることとなる。Amesは「生徒は、彼らが長期にわたって経験する目標—報酬構造の関数として、選択された動機づけシステムにそった社会化をし、自己評価システムも違った要素を組み込んで作り上げ、特定の側面の情報源に依存するようになっていくだろう。そして、価値観を含む判断をするならば、学習環境の構造は、生徒に、彼らの動機づけの過程と達成パターンに影響を与えることで、特定の目標に限ってそれを果たす機会を与えるものだといえるだろう」(p.204)と、協同、競争、個別といった事態設定のもたらすものについての配慮の必要性をまとめとしているのである。

Bass B.M. (1962) は、集団活動における個人の活動の志向性を3つに分類する“*The Orientation Inventory*”を開発している。3つの志向性と

は、自分自身が直接報酬を得ることを期待する「自己志向性」、表面的な方法で調和的な人間関係を維持しようとする「相互作用志向性」、課題の達成を目指して最前を尽くし、持続的に取り組み、集団としての取り組みにも努力を払う「課題志向性」であるが、協同的目標構造のもとでは、成員の集団活動の志向性が「相互作用志向性」にとどまるのではなく、「課題志向性」をもつような事態設定への配慮が必要である。協同という事態操作だけが課題志向的な動機づけを高めるとは限らないからである。

(3) 競合的活動の生起

協同的な目標構造を設定したとしても、成員間で競い合う行動が生じる場合もある。そのような現象を私は「競合」と名づけた（杉江修治 1976）。Kohn, A. (1986) は、競争的目標構造がなくとも成立する競い合いを、目標構造に依存する「構造的競争」に対して「意図的競争」と名づけている。この領域の研究は、協同的な目標構造を作りあげると同時に、その中で目標構造にそった、しかも協同事態がもたらすポジティブな成果を高める成員間の活動を適切に促す方法を明らかにする意味で重要といえる。

Carter, L.F. (1954) は、大学生を対象とした集団課題解決過程の観察結果を分析し、集団過程で成員の間にみられる志向性の異なる個人行動を見いだしている。個人が他者から際立ち、個人的に多様な自分の目標を達成しようとする努力に関連した行動をさす「個人的卓越と達成」、集団が方向づけられている目標達成に際して、集団を手助けする個人の努力に関連した行動を指す「集団による達成への援助」、集団の他成員と心からの、そして社会的満足をもたらす関係を維持し、確立する努力に関連した個人の行動をさす「社交性」という3つである。Shaw, M.E. (1959) は、集団成員個々の「個人的卓越性」を質問紙によって測定し、その得点の高いメンバーからなる集団はパフォーマンスが低くなるという結果を見いだしている。すなわち、個人志向的な行動傾向は集団としての活動を妨げるという結果が明らかにされたのである。

また、集団成員の競合的活動の生起に関連の深い、成員個々の自己志向的要求の集団過程に及ぼす影響を検討したものに Fouriezos, N.T., Hutt, M.L., & Guetzkow, H. (1950) の研究がある。その要求それ自体の満足を

第一義とし、集団目標の達成には無頓着な方向性をもつ、自己志向的要求の範疇に入るものとして、依存性への要求、地位への要求、支配の要求、攻撃の要求、カタルシスの要求の5つがあげられた。それらの要求が集団過程でみられた程度の強さは、討議全般、得られた決定、解決の方法、議長の運営などへの成員の満足度と負の相関を示した。また、決定に要した時間や、決定に達した次項数などのパフォーマンスとも負の相関を示したのである。Aronoff, J., & Messe, L. A. (1971) は、Maslow, A. H. (1954) の分類による安全要求と自尊要求がそれぞれ優越する者同士を集めた等質集団での集団過程を検討している。中でも、自身の力量を示したり、他人からの尊敬を勝ち得ることに強い関心を持つ自尊要求の強い者同士の集団では互いの指図を嫌い、互いに集団内でイニシャティヴをとろうとする行動がみられた。集団内の階層化は生じにくいことが示されたのである。

このように、集団成員のもつ動機づけの方向が、集団過程や集団構造に影響を及ぼし、それがまた集団の成果に影響を与えること、特にそれが競争的な意味合いをもつならば、ネガティブな成果に結びつくことが明らかとなっている。

清水洵 (1973) は、集団が得られる報酬の量によって、成員の行動の志向性が変化することを示している。すなわち、集団が豊かな成果をあげ得るという予測のできる集団、および集団がほとんど十分な成果をあげ得ないという予測の成り立つ集団では、成員は自己中心的な行動をとることが明らかにされたのである。協同行動はその集団の成功可能性に関する成員の認知と関わっているといえるのである。

杉江 (1976) では、そのような個人志向性を、集団事態設定の工夫によって低減させる試みとして、集団編成と課題特性を変数として実証的な検討を試みた。そこでは、操作された能力の異なるペアと能力類似のペアとの相互作用の様態とパフォーマンスを検討したが、高能力の等質条件では、高能力者を交えた異質条件のペアに比べて、相互作用の過程で自発的発言や独語などが多く、競争的な過程がうかがえ、パフォーマンスでは劣る傾向が示された。しかし、相互作用をより多く必要とする課題を与えた場合、競争の生起やそれに伴うパフォーマンスの低下は認められなくなった。すなわち、競争は集団編成、課題構造によってその生起に影響を受けること

が示されたのである。学校学習場面では、それらを参考に、競合生起を減らすための場面設定、教示の仕方などの工夫が要求されよう。

2 協同への実証的接近

(1) 協同と競争に関する研究の発端

「実験社会心理学的研究の発端は、対人的敵対性への関心にあった。それゆえ、実験社会心理学の初期の30年間は、ほとんど競争の研究をしていたと言ってもよかった」(Pepitone, E. A. 1980, p. 3)。また、社会心理学の展開の過程でも「競争と協同の研究は、そこでの理論的、方法論的側面で重要な位置を占め続けてきた」(Pepitone 1980, p. 3)のである。ここでは、社会心理学の展開過程でみられたその表情の変化を考慮しつつ、協同と競争の研究の歴史と成果を検討する。

なお、この領域の研究はアメリカ合衆国を中心に行なわれてきており、そこでの社会的、政治的なできごとが、協同と競争の研究に影響を与えてきた、その関わりにも多少触れることになる。社会的状況の特徴は教育制度にも反映される。個人のみを重視する立場と、人と人との社会的関係性を重視する立場は、合衆国でもその干渉が見られてきた。その記述は、そのまま日本の事例ではないわけだが、国を越えて示唆するものは十分にあるのではないかと考えるのである。

個人間競争を最初に実証的手続きで研究したのは Triplett, N. (1887) であった。彼は、自転車レースの公式記録の分析に基づき、別の選手がいることで競技者は競争本能をかきたてられ、競技者一人では解放できない神経的エネルギーを解放することが自由にできるようになり、また、努力をしようとするようになる、という仮説を立てた。彼は実験室的実験を合わせて行ない、単独事態に比べて競争事態でよい記録を出す者が多いことを明らかにした。また、競争の効果については個人差が関わっていることも示唆したのである。

Allport, F.H. (1924) は、社会心理学を、個人と環境との間の刺激と反応という、行動主義的枠組みの中で考え、社会的刺激は対面集団と共働集団の2種類があると考えた。前者の実験的統制の困難さから、彼は後者を

主に研究対象とし、他人が並行して作業することが、社会的促進を喚起することを明らかにした。また、彼は、共働しなくとも、人がただそこにいるだけという聴衆条件でも社会的促進が見られることを示した。また、Dashiel, J.F. (1935) は、聴衆条件と競争的な教示を合わせることで成績が上昇することを報告したのである。

初期の社会心理学的研究はしかし、より広い社会的場面への応用を念頭に置いたものではなかった。実際の学校教育と協同を関わらせた接近は、Dewey, J. らを中心とした集団によって同時期に進められていたのである。Dewey (1915) は、次のような記述を残している。

社会とは、共通の線に沿い、共通の精神において、また共通の目的に関連してはたらきつつあるが故に結合されている、一定数の人々ということである。この共通の必要および目的が、思想の交換の増大ならびに共感の統一の増進を要求するのである。こんにちの学校が自然な社会単位として自らを組織することができない根本的理由は、まさしく共通の、生産的な活動という要素が欠けているからである。……実のところ、成功のためのほとんど唯一の手段は競争的なものであり、しかもこの言葉の最も悪い意味におけるもの……である。……学校では一人の子どもが他の子どもに課業のうえで助力することは一つの罪になっているのである。……活動的な作業がおこなわれているところでは、すべてこれらの事情は一変する。そこでは、他の者に助力することは……たんに助力される者の力を解放し、衝動を推進する援助であるにすぎない。……インフォーマルな、しかしそれだけにかえっていっそう深い滲透力をもったやりかたで、社会的基盤のうえに学校生活が組織されるのである。(宮原誠一訳 1955, pp. 25-27)

彼の教育論は、Kilpatrick, W.H. によって実践的な展開を見ることになった。Kilpatrick の著書 *Foundation of Method* (1925) は、「限定的に言えば、Dewey の協同観、より一般的に言えば Dewey の教育観を実践可能な形で実現した」(Pepitpne 1980, p. 10) といわれるプロジェクト法の学校への導入を図ったものであった。そこでは子どもに早くから他人と

の相互作用を経験させるための社会的環境も強調されたのである。

1920年代は世界恐慌がその幕引きをした。1930年代はさまざまな社会的態度の表明がなされ、研究の方向にも大きな影響を与えた。プロジェクト法に関わった研究者たちは、おおむねアメリカに根ざした個人主義に対して批判的立場をとり、その結果、彼らの開発した教材や指導過程は、個人主義と競争を肯定する実業的な組織から指弾されるという状況が見られた。実業界からの「アメリカ主義」高揚キャンペーン、教科書の分析による「子どもたちのソビエト化」という反発などは、日本の戦後の教育右傾化の過程と相似する動きであった。

1930年代は、しかし、協同と競争のそれまでの研究をまとめ、とりわけ文化との関わりでその意義を明らかにしようという動きのあった時期でもあった。それはまた、より冷静に「アメリカ主義」を吟味しようとする試みでもあった。代表的な研究は May, M., & Doob, L. の “*Competition and Cooperation*” (1937) と Mead, M. の “*Cooperation and Competition among Primitive Peoples*” (1936) である。

May & Doob は、競争と協同をもたらす条件の整理と、その行動の発達社会心理学的検討を組織的行なった。あわせて、アメリカの学校文化が協同と競争をどのように強調しているか、そこには、協同を良き美德、良き態度と考えていると同時に、競争は人間の本領だと考えて競争を強化する実態があることを示し、さらに、その実態が人間発達のうえで妥当性をもつものかどうかの次のような議論も行なっている。

確かに、アメリカの子どもたちにある特定のことをさせようというときに、玩具や金で釣ることができることを知るのはいずれに意味のあることである。しかし、この種の研究の正味の成果は、いわゆる「人間の本質」への洞察を提供するものではなく、特定の文化で育った特定の人間を特定の課題の解決に動機づけるにはどうすれば良いのかという知識を示したに過ぎない (p. 40)

アメリカの公立学校では、子どもたちは、協同事態よりは競争事態のもとでより効率的に勉強している。……われわれはできる限りの力を込めて、この命題はアメリカの公立学校について言っているものであ

て、他の文化での競争、協同の相対的な強さについては何も語るものではないことを強調したい。(p. 38)

(2) グループ・ダイナミックスの展開と協同、競争

1940年代に入ると、第二次大戦もその重要なきっかけとなった、行動科学における実証的方法論の開発と、Lewin, Kを主導者としたグループ・ダイナミックスの出現が協同と競争の研究に大きな影響を及ぼした。吉森護(1995)は、グループ・ダイナミックスの基本的性格として、次の5点をあげている。

- ① 集団、特に、小集団に関する原理、一般的法則を見いだそうとする基礎学であると共に、現実の社会生活の改善をめざす実践的応用学でもある。
- ② 研究と理論構成において、集団生活の力動的側面を重視する。
- ③ 実験的方法、実験室実験とフィールド実験の両方を重んじる。特に、社会工学の色合いをもつアクション・リサーチが基本的方法として用いられる。
- ④ 個人心理学、社会心理学、社会学、その他の社会科学の統合をめざしている。
- ⑤ 小集団の行動分析に必要な測定法を工夫し、重視する。

有名な食習慣の変容を図った集団決定の研究や、リーダーシップ・スタイルの研究などは、複雑な社会的問題を実証的工夫をもって扱い、しかも、実践的な意義をもった成果であった。また、Lewinの研究構想の実現の一つとしての、ニューヨーク市の「コミュニティ間関係委員会」(CCI)では、人種的偏見、不寛容、社会的・文化的相違に基づく不和への問題設定などを最大のテーマとした問題設定がなされていたが、そこにもグループ・ダイナミックスの方向性と性格が反映されているように思われるのである。

1940年代の末に、Lewinから訓練を受けたDeutschが、本稿の1で、協同と競争の定義に関して詳しく触れた、協同と競争に関する最も基本的で、以後の研究に決定的な影響を及ぼした研究を発表した(Deutsch 1949a, 1949b)。彼は最初の報告で、過去の協同、競争に関する諸研究が、協同事態、競争事態をどう扱ったかを点検し、その2つの事態の違いはそ

それぞれの社会的事態の目標領域の性質の違いにあると結論づけ、あらためて明確な概念的定義を行なったのである。さらに、それぞれの事態の特性に考察を加え、34の基本仮説を立てるにいたった。2番目の報告は、大学生を対象としてそれらの仮説の検証を凶った実験とその結果の検討であった。総じて、そこでは Deutsch の仮説は支持された。協同事態と競争事態との間に、学生の関与では差が見られなかったが、協同的集団の方が成員同士の対等の努力がより多く、仕事の分担も積極的であり、他者のアイデアや示唆に対して受容的であり、同意が多く、助け合いも多く、コミュニケーションも容易に行なわれた。このような集団過程の結果、生産性に関する測度の多くで協同条件がすぐれるという結果が見られたのである。

Deutsch の研究に続いて、Stendler, C., Damrin, D., & Haines, A.C. (1951) は、子ども(2年生)を対象として協同と競争による壁画作成の過程を検討し、大学生と類似の相互作用を見いだしている。子どもにも、Deutsch と同様の、協同と競争の効果に関する結果が報告されたのである。しかし、これは発達段階を考慮した組織的研究には至っていないものであった。また、Grossack, M. (1954) と、Gottheil, E. (1955) は、協同と競争という目標構造の違いが集団凝集性に与える影響について検討を加えた。協同集団では成員への魅力が高まるが、競争集団ではそうはならないという結果が報告された。さらに、Mintz, A. (1951) は、パニック行動と競争の関係を追求した研究を報告している。実験的な研究を通して、パニックが、潜在的には協同事態であり得る事態を、だれも利益を得ることができない競争事態に変えてしまうことを立証した。この研究は、個人的な動機づけが協同することにより、その方が本人にとって得な場合でさえ、事態を競争的にすることがあることを最初に示した研究であった。このように、協同と競争という目標構造に影響を与える変数を加えたり、集団理解に重要な概念との組合せを行なう研究も重ねられるようになっていったのである。

Deutsch の研究を補強する重要なものに Hammond, L.K., & Goldman, M. (1961) がある。彼らは Deutsch の研究における協同条件は、他の集団との競争を教示で与えている点で純粋な協同とは言えないと指摘し、集団間競争の有無を問題とした。彼らは、Deutsch の協同、競争条件をそれぞれ

れ「集団競争」「個別競争」と呼び、さらに、個人は自身の仕事に対しての報酬を受け、他の人が報酬を受けるのを妨げない「個別非競争」と、他の集団の成績に関わりなく、集団内の成員には同じ報酬が与えられる「集団非競争」の2条件を加えて実験を行ない、その結果、競争は個別的であれ集団的であれ、効果的な集団過程をもたらすことはなく、協同条件は集団間競争を含んでいる場合もない場合もパフォーマンスを上げることを見いだした。したがって、Deutschの研究に見られる協同条件のパフォーマンスなどの優越性は、集団間「競争」によるものではなく、当該集団の目標構造の機能によるものであることが確かめられたのである。

Deutsch自身も彼の研究を発展させていった。彼の関心は、個人が協同しようとする際の決定因を探ることにあつたが、1962年の研究では、協同と、信頼、疑念という概念が重要な関わりをもつことを指摘している。さらに、はじめの研究から約四半世紀の後、個人間から国家間にいたる葛藤の生起メカニズムと、さらにはそれを解決するための方策までを取り扱った系統的な研究にまでまとめ上げたのである(Deutsch 1973)。協同と競争に関する研究の展開の重要な方向性をそこに見ることができよう。また、この問題が、いかに人々の実際の生活の中の重要な領域と関わっているかを示す研究であるともいえるであろう。

Deutschの研究パラダイムが幅広く展開していた1950年代は、冷戦による混乱と同時に、国際間の相互的な依存関係が強まりはじめた時代でもあった。UNESCO憲章の第1条では、教育、科学及び文化を通じて諸国民の間の協同を促進することをうたっており、集団間の協同に関する問題意識を刺激した。さらに、集団間の葛藤の低減や敵意の低減を図る研究も促すこととなった。これに関わる研究として、Sherif, M. et al. (1961)は、キャンプの子どもたちを対象に綿密な操作を加え、集団同士の協同や競争事態を作り出し、長期の行動観察を行なった。結果は、協同条件では肯定的な対人行動が特徴的に見られ、一方競争条件では否定的な対人行動が見られた。集団間の敵意は、集団内の相互依存性が強く、各集団同士が目標達成の上で妨害的な関係にある場合に作り出され、目標や課題によって集団同士が相互依存的な関係にあるときには向社会的な行動が見られた。それらはDeutschの見いだした結果と一貫したものであつたが、Sherif et

al. では、集団間行動を扱っており、この領域の研究の拡張を図ったものとなったのである。

なお、協同と競争の効果を包括的に検討したのものとして、1924年から80年までの122の研究をメタ・アナリシスによって分析した Johnson, D.M. et al. (1981) がある。彼らによれば、協同の方が競争よりもすぐれた結果をもたらすという研究は65、その逆は8、差を見いださなかったものが36であり、被験者の年齢の差を考慮しても、一貫して協同条件が有利であるという結論が可能であることを示している。

さて、1950年代の社会心理学の領域では、グループ・ダイナミクスとは別の潮流が動きはじめていた。Festinger, L. (1954) では、社会的比較理論が紹介されているが、それは社会心理学の関心を集団や相互作用を重視する立場から人と人との要素的な関係に移行させ、以後の研究を強く方向づけるものとなったのである。

(3) 競争は社会生活につきものなのか：発達の、比較文化的研究

『『知をめぐる競争』は、それが存在しない場合に比べてはるかに多様な知識を生み、知識の進歩を加速する……競争は少なくとも知識の多様性、新奇さ、体系性、実用性、そして分量を増大させる』（竹内靖雄 1978, p. 37）というような意見は、教育に全面的に競争を導入することが必要という提言をした高根正昭（1980）と同様、社会において、教育の世界でも、競争原理の導入が望ましいとする立場と論拠を明確に示している。しかし、彼らの論拠は、すでに見てきたとおり、実証的研究成果によって明らかになった事実をふまえたものではない。むしろ、否定されてきた事柄に固執した、検証されていない信念が根拠となっているにすぎないものである。近代から現代にいたる生産性の上昇をもって人類の成功と考え、その時人類がたまたまとった戦略である競争を肯定的にあとづけしたに過ぎないこのような見解は、すでに19世紀後半に Spencer, H. によって掲げられたた、社会の間にも有機体相互の間にあるのと同じ生存競争があるとす「社会進化論」にその根をもっているように思われるのである。

しかし、冷静に考えてみれば、たとえ実証的な資料がなくとも、競争と協同の関わりについては上とは別の結論を引き出すことの方がずっと妥当

であるように思われる。競争が協同に優先する人間行動の原理であり、人類に幸福をもたらす原理であったとは、常識的にも考えられないことである。「数百万年の期間そしてひろい空間にわたる変化に富んだ状況を通じ、一本の普遍的な糸がある。それは協力と相互援助という糸である。もしそれがなかったら、あるいはその代わりに競争と相互の敵意という糸があったとしたら、私達の種は決して人類に到達しはしなかつたろう。もし私達の祖先がお互いにとって生れつきの殺人者だったとしたら、彼らは生きのびるのに過酷なときを過ごしたであろう。また、もし彼らがお互いに協力し合う身体的属性と知性を発揮させていなかったとしたら、他の捕食動物に殺され滅ぼされて当然であつたろう。人類の進化に必要な要素は個人の協力であって、それなくしては私達の進化はありえなかつたろう」(Montagu, A. 1976, 訳書 1982, p. 139)。そして、「どんなグループにおいても、お互いにめんどろを見合った人々は、相互の敵意や暴力によって特徴づけられたグループより、はるかに長く生きのびた」(同前 p. 160) はずなのである。Johnson, D.W., & Johnson, R.T. (1974) でも、他の社会と同じように、アメリカの社会でも、人間の相互作用のほとんどは、競争的でなく、協同的なものであるとまとめられている。

ここでは、競争があたかも人間の本能であり、人間性の一部であるような考えに対して、それはたまたまわれわれが選びとってきた社会の中で学習されてものであることを、実証的資料に基づき明らかにする一連の研究を見ていきたい。

競争も協同も学習されたものであるという初めての指摘は、過去の研究の検討から May & Doob (1937) によってなされた。とりわけアメリカ合衆国の子どもたちがどのように競争を学習して行くのかは、Kohn, A. (1986) が、その2章で事例を多く紹介している。

競争の効果についての信念を矯正するのに有効な研究は、次の発達の次元と比較文化的次元を加えた実験研究であろう。

1960年代から70年代にかけて、Madsen, M.C. を中心に行なわれた研究は、年齢や文化を超えて適用できるいくつかのゲームを活用して行なわれた。Madsen らの研究に先行するものとして、McKee, J.P., & Leader, F.B. (1955) があるが、そこでは、3, 4歳児を対象に、積み木課題を用

いて、競争的行動の多寡を、年齢、性、家庭の社会経済的地位、の間で比較した。その結果、年長、男児で競争行動が多いのに加えて、社会経済的地位の低い子どもの方が競争的であることが示された。この結果は、地位から遠い者ほどそれを多く求めるといふ、不足状況の中での生活経験が背景にあると考えられたのである。

Madsen (1967) は、南部メキシコの7～10歳の子どもを、都市部の中流層、都市部の貧困層、田舎のインディアン村の3つの環境条件から選出し、協同的行動と競争的行動のいずれをより多くとるかを検討した。その結果、都市部中流層の子どもが他の2条件よりも競争的であることが明らかとなった。彼らは、メキシコの子どもの躰などに関する先行研究などを参考にし、この結果は、共同作業が重んじられ、それをすることで親から賞賛が得られるという経験と、親の職業に競争的要素が強く、学校教育でも競争を助長するような教師からの働き掛けのある環境とが影響していると推測したのである。

アメリカの黒人と白人を対象とした研究もいくつか見いだすことができる。Sampson, E.E., & Kardash, M. (1965) は、7～11歳の子どもを対象とした実験で、黒人の子どものペアの方がコーカサス系の子どものペアよりも協力的であることを見だし、Richmond, B.O., & Weiner, G.P. (1973) は、2年生の子どもを対象に、白人と黒人の子どもを比較したところ、黒人同士のペア、黒人と白人のペア、白人同士のペアの順に非競争的であった。

Miller, A.G., & Thomas, R. (1972) は、ブラックフット・インディアンの子どもと都会のカナダ人の子どもを比較し、インディアンの子どもの方がはるかに効率よく協同することを見いだしている。

Shapira, A., & Madsen (1969) では、子どもの成育環境の差がより明確な事例を得ることができるイスラエルで実験を試みている。イスラエルでは、都市部の子どもは達成や成功に対して親や教師から激励を受ける。一方、キブツの子どもたちは、幼時から集団で仕事をするように躰けられ、大人たちは競争をさけるように子どもを指導するし、また、競争を望ましい社会規範として受け入れない。この実験では、都市部とキブツからの6～10歳の子どもを対象とした。結果は、都市部の子どもに比べてキブツの

子どもは競争的行動をとることが少なく、集団として一体となって作業し、報酬が平等に配分されることに関心を持ったのである。この結果は Shapira (1974) でも認められている。また、キブツの子どもたちは、田舎のアラブ人の子どもたちよりも協同的であった (Shapira, & Lomrantz, J. 1972)。また、集団に貢献する必要がないときでさえ、キブツの子どもたちは集団に貢献しようとしたのである (Shapira, & Madsen 1974)。

Kagan, S., & Madsen (1971) では、英国系アメリカ人、メキシコ系アメリカ人、メキシコ人の子どもを対象に、協同的行動と競争的行動の発現を比較した。その結果、英国系アメリカ人、メキシコ系アメリカ人、メキシコ人の順で競争行動を多くすることが示された。また、年齢の高い子どもほど (4, 5 歳児に比べて 7~10 歳児の方が) 競争的であった。Kagan, & Madsen (1972a) では、協同しなくては解決できない課題を用いたところ、アメリカ人の子どもは協力して解決に取り組む行動を示した。このことは、アメリカの子どもが協力する能力をもたないから競争的であるという解釈を排除したのである。また、Kagan, & Madsen (1972b) では、アメリカ人では、5, 6 歳の子どもより 8~10 歳の子どもの方が明らかに對抗的で、アメリカ人の大人と同様に、自分の利益を犠牲にするような場面でも相手の利益を少なくする方に努力する傾向が見られたのである。

1970 年代も後半に入るとこの領域の研究はその関心の幅をさらに広げていく。日本人も対象とした Toda, M., Shinotsuka, H., McClintock., & Stech, F. J. (1978) では、ゲーム相手の報酬量に関する比較情報のフィードバックの効果を検討すると同時に、被験者についてはフランドル系ベルギー人、ギリシャ人、日本人、メキシコ系アメリカ人、イギリス系アメリカ人の 2, 4, 6 年生を比較した。主な結果は年齢と共に競争的選択行動が増したことと、日本人の子どもが最も競争的で、ベルギー人の子どもが最も非競争的であることが示されたことである。ベルギー人の子どもの結果は McClintock, & Nuttin, J. (1969) の結果と同様であったが、そこでは、ベルギー人たちは大学に行く頃までにはアメリカ人を凌ぐほどの競争心を獲得するということが報告されており、文化による発達のなずれのあることも承知しておくべきであろう。また、日本の子どもは協同的な行動に関しては最もそれが多く、効果の測度のとり方、言い換えれば、協同、

競争のあらわれる様相は、文化によって相違する点も承知しておくべきことが分かったのである。

このような諸研究は、競争が人間社会において必然的なものだという議論に疑問を呈するに十分な根拠を与えている。競争は協同と同様、子どもが育つ過程で獲得していく行動様式なのである。「子どもたちは協同することを学習するのであり、どちらを選ぶかといわれればこの協同的な手はずの方を好むようだということについては、説得力ある証拠がある」(Kohn 1986, p.32) のである。競争は人間性から生じたものではなく、社会構造から引き出されたものである。アメリカを中心とした、日本もその例外ではない社会では、容易には動かしがたい競争的なシステムができあがっているが、生活の論理までも、いまあるシステムのコピーとして作り上げていく必要はないのである。

3 協同の教育的意義

(1) 競争的教育の見直しの動向

アメリカ教育使節団は、その報告書の中で、日本の教育の戦前からの「試験第一主義」を取り上げ、

試験の準備に支配されている教育制度は、形式的で紋切型になってしまふものである。それは、教師と生徒の側の大勢順応主義を作り出す。それは、研究と批判的判断の自由を窒息させ、全体としての社会よりもむしろ狭い官僚社会の利益に迎合するお上の操縦に容易に身をまかせ。そしてついには、この制度は、時として欺瞞や腐敗あるいは不健全な欲求不満につながる異常な競争心を生み出すのである。(村井実 1979, p. 33)

と、そのもたらす問題点も幅広く見通した記述を行なっている。その後も、諸外国との比較で、わが国の学校教育における、入試をゴールとした競争の激しさが重ねて指摘されてきている (Cummins, W.K. 1980, Rohlen, T.P. 1983, Duke, B.C. 1986, Stephens, M.D. 1991) ように、状

況は改善されていない。

このような競争的学校文化が成立してきた過程について、齊藤利彦(1995 a, 1995 b) は、それが生徒管理の機能を一体的に持つものとして捉え、明治初期からの検討を行なっている。そこでは同時に「明治という時代は、一面で競争が社会全体に浸透していった時代であった」(1995 a, p. 284) との指摘もなされており、その根の深さが示されている。また、天野郁夫(1996) は、日本の教育システムの中の競争は、文部省の強い統制と有機的に結びついてきたものであることを、明治以来の政策的背景の考察によって結論づけている。

このような歴史的な関心が日本の教育における競争の実態と機能を明らかにしていっている一方、現状の教育における競争の優勢に対する問題の指摘と対応への取り組みも、徐々に行なわれるようになってきている。

遠山啓(1976) の、教育における競争原理への批判は比較的早くなされたものである。彼は「生徒同士の競争心を刺激して学習意欲を高める(には) ……ひとつの条件がある。それはすべての参加者に勝つチャンスがあるということである」(pp. 122-123) と述べている。競争事態であれば、限られた者、そしてしばしば一人だけにしか勝つチャンスはないわけで、遠山のこの指摘は競争事態の問題点の核心を指摘したものといえる。遠山は対応策として評価システムの改善をあげている。また、雑誌『教育』では、1991年2月号と1993年1月号で、学校における競争の問題を特集として取り上げている。しかし、その中身は競争の実態の報告(勝俣裕子 1991, 田中仁一郎・他 1991, 千田忠 1993, 佐々木英一 1993, 千葉昌弘 1993) や、その分析(久富・高口明久 1993), 及び理論的解説または解析(山村賢明 1991, 長谷川裕 1991) にとどまっておき、具体的な対応についてはほとんど触れられていない。池谷壽夫・他(1988), 久富(1993) の著書でも、その論考、実態の記述と分析は興味深いものがあるが、実践的対応に関する具体的な論及はほとんどない。日本での競争の問題点に対する関心の高まりの中で、そこへの接近方法や問題関心に欠落している所があるように考えられるのである。

その欠落点はなにかとえば、競争の克服を、どのように授業を中心とした学校学習の中で実践していくかということであろう。すでに資料が重

ねられてきている歴史的、制度的側面からの認識を背景に、より望ましく、より効果的な原理を背景とした実践的対応を図ることが必要なのである。その時に、学習集団の意義、とりわけその協同的活動の意義が十分踏まえられていなくてはならないだろう。不思議なことに、先にかかげた競争に関する批判的論説では、協同を明確に、同時に取り上げているものがないのである。

(2) 協同の教育的意味の再確認

協同と競争は集団の置かれた目標構造によって定義される。協同は、仲間との信頼に支えられた人間関係がもたらす動機づけの高まりと、成員間の相互作用と、彼らの自律的な活動によって、集団及びその構成員のパフォーマンスや習得にポジティブな効果をもたらす。また、協同の過程で社会的技能、社会的関係面での成員の成長と、あわせて成員個人の自尊心、自律性などを高める効果がある。さらに、協同はそれ自体、次の世界を担う子どもたちへの教育目標として価値あるものといえるだろう。

さて、そのような意義を持つ協同は、切磋琢磨といった見かけ競争的な集団過程も含むものであることは前にふれた。堀尾輝久(1994)は、競争には「お互いを高めあう競争」と「相手を蹴落とす競争」の2種類があると言っている。このうち前者は、目標構造からいえば協同の範疇に入るものである。協同と競争に関しては、これまで日常的に行なわれてきた、集団の過程に着目するのではなく、目標構造で分類することが望ましいのではないか。競争の一部を容認するといったこれまでの論調を避け、切磋琢磨も含む協同を学習指導の原理として一貫させ、競争的目標構造を排除するという表現の方が誤解が少なくてすむのではないだろうか。

嘉納治五郎は、柔道のみならず、生活の原理として、心身の力を最も有効に使用するという「精力善用」とならべて「自他共栄」を主張している。対人的な闘争を主な過程としているように思われる柔道の世界でも、自己と他者の共栄を図ることに主眼が置かれているのである。相手と精一杯戦うことは、自分ばかりでなく相手を伸ばす、相手が精一杯戦ってくれば自分が成長できる、そこに柔道による戦いの意義があるというのである。共に伸びることを目標とするそのような活動は、協同の要件を満たしてい

る。

人の本性として、すでに社会を成し団体生活を学んでいる以上、その団体・社会を組織している各成員が、その他の成員と相互に融和協調して共に栄えることほど大切なるはあるまい。各成員がことごとく相互に融和協調しておれば、己のはたらきが己自身の益となるのみならず、他をもまた同時に利し共々幸福を得るは明らかであり、他の活動が、その人自身のためばかりでなく、己を始めその他一般の繁栄を増すのはもちろんのことである。かような次第で、その融和協調の大原則はつまり自他共栄ということに帰する」(嘉納 1983, pp. 92-93, ただし初出は1926)

「切磋琢磨」「良きライバル」は競争事態と捉えてはならない。それらの活動の末に序列付けをしてしまい、厳しい集団過程なればこそ獲得できたかもしれないより深い人間関係と、次につづく活動意欲を削ぐというような愚は、それらの活動を協同と十分認識することで犯さずにすむだろう。

(3) 競争をめぐる4つの神話とその検討

Kohn (1986) は、競争を支持する主張は、ほとんどが誤った情報に基づいていると述べている。そのような主張の主な根拠を4つの神話として取り上げ、科学的研究に基づいて検討し、そこに見られる間違いを指摘している。

神話のその1は「競争は避けられない」というものである。競争は人間性の一部であるという主張がその神話を支える主要な根拠である。Spencer, H. らが主張した社会進化論がこの論拠に大きな力を貸してきた。『『適者生存』のような生物学的な思想は……社会を理解しようと試みる際には全く役に立たないという結論』(Hofstadter, R. 1955, 訳書 p. 247) が、学問の世界では明らかになっているにもかかわらず、競争を人間性の原理と考える考え方は人々の間に深く根を張っている。Kohn は、主に実験的手法も含む比較文化的な研究資料を用いて、競争は協同と同様、学習されるものであることを論証し、競争を不可避とする考えが実証的根拠を持たな

いことを明らかにした。学校学習においても、競争を人間性の原理に基づく必然とすることには根拠がないことが明確になったのである。

神話のその2は「競争は生産的だ」というものであった。競争社会の中では競争の勝者がかかげる成果が目立ち、競争こそが生産的であるかのような錯覚をもたらす。しかし、冷静に、競争以外の事態、特に協同事態ではそのような成果は得られなかったのかということに考えをめぐらす事はしない。競争を支持する者の思考は、競争の成功的事例を根拠にしたに過ぎないものばかりである。ちょうど早期教育の効果を、わずかな成功例だけを取りあげ（それも早期教育の結果か本人の特性によるものかの吟味はせずに）、その背後にある数えきれない失敗例を考慮しようとしなくて吹聴するのと同じ思考タイプ、または意図的歪曲をそこに見ることができるのである。競争が動機づけるのは他者に対する勝利である。そこでは生産性または個人の学習における完全習得そのものは二義的なものとなる。数多くの実証的研究が協同の競争に対する優位性を立証してもきている。神話の2は全く根拠を持たないものといえるだろう。また、付け加えるならば、競争原理の成功例として引き合いに出される産業の発展も、何を成功の指標としているのか、たとえば階層化に伴う下層に位置する人々の幸福などをどう考えるのか、といった点を含み込んで考慮した場合、評価は変わってくるであろう。

神話その3は、「競争はより楽しい」というものである。遊びやスポーツには競争的な要素がつきまわっている。したがって競争の養護者は、競争のない社会は無味乾燥なものだと述べることになる。しかし、Kohnが「遊びは『過程志向』を意味しており人が行なっているそのこと自体に関心をもつものであり、『結果志向』とは違う」(p. 81)と指摘し、また「競争と挑戦とを同義のものとする考えをあまりはおかしてはならない。多くのスポーツは……競争を必要としないのである」というスポーツの本質を指摘したSadler, W.の論旨を引用している(p. 88)ように、競争するから楽しいという神話は根拠をもつものではなく、むしろ遊びやスポーツから競争的な目標構造を排除することが楽しみを分かち要件であることが分かるのである。

神話その4は、「競争は人格形成に役立つ」というものである。ただしこ

のような神話は日本では受け入れにくいものであるように感じられる。社会が要求する人格の中身の相違によるものであろう。競争によって形づくられる人格は意欲の高さを含むだろうが、その方向に問題があり、また、結果重視、二者択一的態度などを合わせもつことになるため、人間性の観点から決して好ましいものではない。今日の社会における狭い意味での適応に対処する人格をさすにすぎないことになろう。Kohn は、神話を支持する立場の人々も含めた心理的傾向を示唆する含みをもちながら「われわれが競争するのは自分の能力に対していただいている基本的な疑いを克服しようとするためであり、そして、最終的には、自尊心の低さを補償するためである」という命題を提起し (p. 99) たくさんの実証的資料を用いてこの命題を裏づける考察を重ねている。

競争をめぐる神話は、競争を前提にして、それに都合の良い資料だけを捜し出して組み立てられたものといえよう。それらの資料はまた、競争社会では表面的で見えやすいところにただよっている。しかし、人間と社会の本質と在り方までも視野に入れた、科学的で公平な検討を加えれば、それらの神話はほとんど根拠をなくすることが明らかとなった。教育においても、競争の原理が主張される場合、ここと同様の有力な反論が可能である。

(4) 集団間競争について

集団内の協同を促す手法として集団間競争が有力だという考えがある。たしかに Deutsch (1949b) の研究でも、集団間競争条件下で作業する集団内での凝集性の高まりが報告されている。このことは著名な Sherif, M. らの「サマー・キャンプ」研究でも認められている現象である (Sherif, & Sherif, C. W. 1953)。また、山根薫 (1956) も実験により同様の結果を報告している。しかし、集団の生産性に対しては、集団内で協同していることが重要なのであって、集団間競争がそれに及ぼす影響は大きいものではないという指摘が、根拠をもっていくつかなされている。その一つは前項で言及した Hammond & Goldman (1961) の研究であり、また Johnson, D. W. & Johnson, R. T. (1989) による Deutsch (1949b) のデータの再分析である。

なお, Myers, A. (1962), Rabbie, J.M., et al. (1974), Worchel, S., Andreoli, V.A., & Folger, R. (1977) らの研究によれば, 集団が競争で成功すれば凝集性を生むが, 失敗した場合には成員間の満足度が低下し, 集団のモラルが低くなることが示されている。また, Brown, R. J., & Abrams, D. (1986) は, 集団間の目標関係を協同的なものにした場合には二つの集団の成員は互いに好意を増し, 協同的と認識するようになることを報告している。また, 集団間競争を経験した集団は, その後集団間の協同をさせると, 外集団に対する好意を増加させるが, それは協同が成功した場合であり, 失敗すると外集団への好意度は低下する, しかし, 集団間協同を経験した集団ではたとえ集団間の協同が失敗してもそのような結果は見られないことも示されている (Worchel, Andreoli & Folger 1977)。

Dunn, R. E., & Goldman, M. (1966) の研究では, 集団間競争は外集団の成員に対する否定的な態度を生起させることを明らかにしている。集団相互の関係を促進するのに集団間競争は役に立たない。杉村省吾 (1972) は, 集団内協同集団間競争の導入は, 集団間非競争の協同に比べて, 凝集度や生産性で差はなく, 集団内のライバル意識, 敵意を増加させることを報告している。Warring, D., et al. (1985) は, 民族間, 人種間の協力を促進するには, 集団間の協同が有効であることを提起しているが, 学校学習に移して考えれば, 学級内の小集団間の協同は学級内の協力を促進し, 学級間の協同は学校内の協力を促進する条件といえよう。

片岡徳雄 (1975) は, 集団主義教育の技法として用いられている班競争を取り上げている。かれは全生研常任委員会の班競争に関する意義への言及「班競争によって集団の中に最初に引き出してこなければならぬことは, 第一に, 班や学級における矛盾対立をあばき出すことである。第二は, そこにあばき出された問題に対する, 激しい行動的ないどみかかりとやる気である。そして第三は, 集団的なちからのデモンストレーションである」(全生研常任委員会 1971, pp. 111-112) に対して, 「班競争一点検一ボロ班一いがみあい・えげつない争い」に示される, 目的のために手段を選ばない手法には, 人間形成の手法としてあるいは社会革命 (集団の変容) の手法として, 厳しい検討が要求される」(p. 35) と批判している。讃岐幸治 (1975) は, 片岡 (1975) の提出した集団主義教育の効果に関する仮説に基

づき教育現場を用いた事例的なアクション・リサーチを行い、班競争に主眼を置いた指導法と、班の活動を順位づけを伴わずに点検する指導法との成果の比較を行なった。その結果、班競争条件の方が集団雰囲気や学習意欲において劣る傾向が示され、また、学習意欲では班の間の格差が大きいという結果も示唆された。あわせて、学習成果も班競争条件の方がやや劣るという結果が示されたのである。

文 献

- Allport, F.H. 1924 *Social psychology*. Houghton Mifflin.
- 天野郁夫 1996 日本の教育システム：構造と変動 東京大学出版会
- Ames, C. 1984 Competitive, cooperative, and individualistic goal structures: A cognitive-motivational analysis. In R.E. Ames & C. Ames (eds.) *Research on motivation in education: Student motivation*. Academic Press. pp. 177-207.
- Aronoff, J., & Messe, L.A. 1971 Motivational determinants of small-group structure. *Journal of Personality and Social Psychology*, 17-3, 319-324.
- Bass, B.M. 1962 *The orientation inventory*. Consulting Psychologists Press.
- Brown, R.J., & Abrams, D. 1986 The effects of intergroup similarity and goal interdependence on intergroup attitudes and task performance. *Journal of Experimental Social Psychology*, 22, 78-92.
- Carter, L.F. 1954 Evaluating the performance of individuals as members of small groups. *Personnel Psychology*, 7, 477-484.
- 千葉昌弘 1993 高知の学力問題：公立中・高校への不信の増幅と私学志向の早期化 教育 557, 44-51.
- 千田忠 1993 青森県における進学率向上対策事業と学力競争の激化 教育 557, 26-35.
- Cummings, W.K. 1980 *Education and equality in Japan*. Princeton University Press (友田泰正訳 1981 ニッポンの学校 サイマル出版会)
- Dashiel, J.F. 1935 Experimental studies of the influence of social situations on the behavior of individual human adults. In C. Murchison (ed.) *A handbook of social psychology*. Clark University Press.
- Deutsch, M. 1949a A theory of competition and cooperation. *Human Relations*, 2, 129-151.
- Deutsch, M. 1949b An experimental study of the effect of cooperation and competition upon group process. *Human Relations*, 2, 199-231.
- Deutsch, M. 1973 *The resolution of conflict: Constructive and destructive*

- processes*. Yale University Press. (杉田千寿子訳 1995 紛争解決の心理学 ミネルヴァ書房)
- Dewey, J. 1915 *The school and society (revised edition)*. University of Chicago Press. (宮原誠一訳 1955 学校と社会 岩波書店)
- Duke, B.C. 1986 *The Japanese school*. (國弘正雄・平野勇夫訳 1986 ジャパニーズ・スクール 講談社)
- Dunn, R.E., & Goldman, M. 1966 Competition and noncompetition in relationship to satisfaction and feelings toward own-group and nongroup members. *Journal of Social Psychology*, **68**, 229-311.
- Festinger, L. 1954 A theory of social comparison processes. *Human Relations*, **7**, 117-140.
- Fouriez, N.T., Hutt, M.L., & Guetzkow, H. 1950 Measurement of self-oriented needs in discussion groups. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **45**, 682-690.
- Gottheil, E. 1955 Changes in social perception contingent upon cooperating or competing. *Sociometry*, **18**, 132-137.
- Grossack, M. 1954 Some effects of cooperation and competition on small group behavior. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **49**, 341-348.
- Hammond, L.K., & Goldman, M. 1961 Competition and non-competition and its relationship to individual and group productivity. *Sociometry*, **24**, 46-70.
- 長谷川裕 1991 学校の制度的秩序と競争 教育 **532**, 6-16.
- Hofstadter, R. 1955 *Social Darwinism in American thought (rev. ed.)*. Beacon Press. (後藤昭次訳 1983 アメリカの社会進化思想 研究社)
- 堀尾輝久 1994 日本の教育 東京大学出版会
- 池谷壽夫・後藤道夫・竹内章郎・中西新太郎・吉崎祥司・吉田千秋 1988 競争の教育から共同の教育へ 青木書店
- Johnson, D.W., & Johnson, R.T. 1974 Instructional goal structure: Cooperative, competitive, or individualistic. *Review of Educational Research*, **44**, 213-240.
- Johnson, D.W., & Johnson, R.T. 1989 *Cooperation and competition: Theory and research*. Interaction Book Company.
- Johnson, D.W., Maruyama, G., Johnson, R., Nelson, D., & Skon, L. 1981 Effects of cooperative, competitive, and individualistic goal structures on achievement: A meta-analysis. *Psychological Bulletin*, **89**, 47-62.
- Kagan, S., & Madsen, M.C. 1971 Cooperation and competition of Mexican, Mexican-American, and Anglo-American children of two ages under four instructional sets. *Developmental Psychology*, **5**, 32-39.

- Kagan, S., & Madsen, M.C. 1972a Experimental analysis of cooperation and competition of Anglo-American children and Mexican children. *Developmental Psychology*, **6**, 49-59.
- Kagan, S. & Madsen, M.C. 1972b Rivalry in Anglo-American and Mexican children of two ages. *Journal of Personality and Social Psychology*, **24**, 214-220.
- 嘉納治五郎 1983 嘉納治五郎著作集 1 五月書房
- 片岡徳雄編 1975 集団主義教育の批判 黎明書房
- 勝俣裕子 1991 中学生のゆれる内面にかかわって：子どもたちとの“手紙”のやりとりを通して考えさせられたこと 教育 **532**, 17-27.
- Kilpatrick, W.H. 1925 *Foundations of method*. Columbia University Press.
- Kohn, A. 1986 *No contest: The case against competition*. Houghton Mifflin Co. (山本啓・真水康樹訳 1994 競争社会をこえて：ノー・コンテストの時代 法政大学出版社)
- 久富善之 1993 競争の教育 労働旬報社
- 久富善之・高口明久 1993 今日の学力競争の社会的土台：競争の秩序化・二重性、そして相対化 教育 **557**, 6-17.
- Madsen, M.C. 1967 Cooperative and competitive motivation of children in three Mexican sub-cultures. *Psychological Reports*, **20**, 1307-1320.
- Maslow, A.H. 1954 *Motivation and personality*. Harper & Brothers.
- May, M., & Doob, L. 1937 *Competition and cooperation*. Social Science Research Council.
- McClintock, C.G. & Nuttin, J. 1969 Development of competitive game behavior in children across two cultures. *Journal of Experimental Social Psychology*, **5**, 203-218.
- McKee, J.P., & Leader, F.B. 1955 The relationship of socio-economic status and aggression to the competitive behavior of preschool children. *Child Development*, **26**, 175-182.
- Mead, M. (ed.) 1936 *Cooperation and competition among primitive peoples*. McGraw-Hill.
- Miller, A.G., & Thomas, R. 1972 Cooperation and competition among Black-foot Indian and urban Canadian children. *Child Development*, **43**, 1104-1110.
- Mintz, A. 1951 Nonadaptive group behavior. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **46**, 150-159.
- Montagu, A. 1976 *The nature of human aggression*. Oxford University Press. (尾本恵市・福井伸子訳 1982 暴力の起源 どうぶつ社)
- Myers, A. 1962 Team competition, success, and the adjustment of group

- members. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **65**, 325-332.
- 西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫 1979 岩波国語辞典 (第三版) 岩波書店
- Pepitone, E. A. (ed.) 1980 *Children in cooperation and competition*. Lexington Books.
- Rabbie, J.M., Benoist, F., Oosterbaan, H., & Visser, L. 1974 Differential power and effects of expected competitive and cooperative intergroup interaction upon intra- and outgroup attitudes. *Journal of Personality and Social Psychology*, **30**, 46-56.
- Richmond, B.O. & Weiner, G.P. 1973 Cooperation and competition among young children as a function of ethnic grouping, grade, sex, and reward condition. *Journal of Educational Psychology*, **64**, 329-334.
- Rohlen, T.P. 1983 *Japan's high schools*. University of California Press. (友田泰正訳 1988 日本の高校: 成功と代償 サイマル出版会)
- 斉藤利彦 1995 a 競争と管理の学校史: 明治後期中学校教育の展開 東京大学出版局
- 斉藤利彦 1995 b 試験と競争の学校史 平凡社
- Sampson, E.E., & Kardush, M. 1965 Age, sex, class, and race differences in response to a two-person non-zero-sum game. *Journal of Conflict Resolution*, **9**, 212-220.
- 讃岐幸治 1975 社会的評価と学習意欲 片岡徳雄編 集団主義教育の批判 黎明書房 第6章 pp. 169-199.
- 佐々木英一 1993 凝縮される学力競争: 鹿児島県からの報告教育 **557**, 26-35.
- Shapira, A. 1974 Developmental differences in competitive behavior of kibbutz and city children in Israel. *Journal of Social Psychology*, **98**, 19-26.
- Shapira, A. & Lomrantz, J. 1972 Cooperative and competitive behavior of rural Arab children in Israel. *Journal of Cross-cultural Psychology*, **3**, 353-359.
- Shapira, A. & Madsen, M. C. 1969 Cooperative and competitive behavior of kibbutz and urban children in Israel. *Child Development*, **40**, 609-617.
- Shapira, A. & Madsen, M.C. 1974 Between and within group cooperation and competition among kibbutz and non-kibbutz children. *Developmental Psychology*, **10**, 140-145.
- Shaw, M.E. 1958 Some motivational factors in cooperation and competition. *Journal of Personality*, **26**, 155-169.
- Shaw, M.E. 1959 Some Effects of individually prominent behavior upon group effectiveness and member satisfaction. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **59**, 382-386.

- Sherif, M., Harvey, O.J., White, B.J., Hood, W.R., & Sherif, C.W. 1961 *Intergroup conflict and cooperation: The robber's cave experiment*. University of Oklahoma, Institute of Group Relations.
- Sherif, M., & Sherif, C.W. 1953 *Groups in harmony and tension: An integration of studies on intergroup relations*. Octagon Books.
- Stendler, C., Damrin, D., & Haines, A.C. 1951 Studies in cooperation and competition I: The effect of working for group and individual rewards on the social climate of children's groups. *Journal of Genetic Psychology*, **79**, 173-197.
- Stephens, M.D. 1991 *Japan and education*. Macmillian Press. (上杉孝實・江阪正己訳 1993 イギリス教育学者のみた日本の教育 新世社)
- 杉江修治 1976 集団問題解決に及ぼす集団構成の効果: とくに成員の能力を基準として 心理学研究 **47-4**, 179-189.
- 杉村省吾 1972 児童集団における協同と競争が集団諸機能に及ぼす影響に関する実験的研究 武庫川女子大学紀要(教育編) **20・21** 集合冊, 1-20.
- 高根正昭 1980 知的競争社会のすすめ 東洋経済新報社
- 竹内靖雄 1978 競争はなぜ必要か 日本経済新聞社
- 田中仁一郎・宮原広司・宮田雅己・奥平康照・太田政男・乾彰夫・久富善之 1991 座談会・競争の教育に立ち向かう: 理論的・実践的争点をさぐる 教育 **532**, 28-54.
- Toda, M., Shinotsuka, H., McClintock, C.G., & Stech, F.J. 1978 Development of competitive behavior as a function of culture, age, and social comparison. *Journal of Personality and Social Psychology*, **36**, 825-839.
- 遠山啓 1976 競争原理を超えて: ひとりひとりを生かす教育 太郎次郎社
- Triplet, N. 1897 The dynamogenic factors in pacemaking and competition. *American Journal of Psychology*, **9**, 507-533.
- 山村賢明 1991 日本的集団主義と競争 教育 **532**, 6-16.
- 吉森護 1995 グループ・ダイナミックス 小川一夫(監) 社会心理学用語辞典 68-69. 北大路書房
- Warring, D., Johnson, D.W., Maruyama, G., & Johnson, R. 1985 Impact of different types of cooperative learning on cross ethnic and cross-sex relationships. *Journal of Educational Psychology*, **77**, 53-59.
- Worchel, S., Andreoli, V.A., & Folger, R. 1977 Intergroup cooperation and intergroup attraction: The effect of previous interaction and outcome of combined effort. *Journal of Experimental Social Psychology*, **13**, 131-140.
- 全生研常任委員会(編) 1990 新版学級集団づくり入門: 小学校 明治図書
- 全生研常任委員会(編) 1991 新版学級集団づくり入門: 中学校 明治図書